第５次

概報 下堤遺跡

秋田市四ツ小屋小阿地

1973.1.

秋田市教育委員会
秋田考古学協会

序

第五年次を迎えた『下堤遺跡』の発掘調査は、国県並びに秋田考古学協会等のご指導ご援助、また、土地の所有者塚本総業株式会社のご協力によって実施しました。

調査は、約11.7ヘクタールにわたる広範な台地全体におよび、その結果、時代を異にする住居跡群が、台地全体に分布していることなど多くのことが判明しました。また、遺構から発見した種子が、思いがけずも発芽したことから、急きょ、秋田県農業試験場のご協力を仰ぎ、その後もそれぞれの機関で、さらに研究を進めているところであります。このように、学術上多方面の協力を得なければ解明し得ない同遺跡は、その重要性を如実に物語っているものと考えられます。

今次の発掘調査で、このように大きな成果を得られたのも、調査員をはじめ、調査に参加された多くのかたがた、並びに関係機関、また、宿泊の提供等何かとおせわいただいた秋田カワサキ販売株式会社、有限会社ドライブインあきた、地元の人たちなど、心あたたまる協力のたまものと深く感謝いたしております。

本概報を刊行するにあたって、調査結果をまとめていただいた富樫、鍋倉両調査員に謝意を表するとともに、この概報が多くのかたがたから、文化財保護のためにご活用いただければ、まことに幸甚に存じます。

昭和48年1月

秋田市教育長　船　山　忠　重

▲ 遺跡の遠景

▼ 遺跡の位置　S＝1／2万

遺跡の位置と現状

下堤遺跡は秋田市四ツ小屋小阿地字下堤にある。すなわち、秋田市から国道13号線を南下し、横山部落を過ぎると三叉路がある。そこから右の旧道に入り西へ1.2kmほど入ると秋田市を一望できる台地の先端に出る。遺跡はこの先端部にある。奥羽本線四ツ小屋駅より北東約1km、秋田市の中央部より東南約7kmの位置にある。遺跡の南約1.5kmには太平山に源を発する清流岩見川と雄物川との合流点がある。数年前までは、この地域一帯の台地は畑地であったが、現在は東京の塚本総業株式会社が買収し、目下開発計画を進めており、かっての畑地は一面の荒場と化している。

なお、この遺跡の他に周辺の台地には20カ所の遺跡（一部破壊されたものあり）を確認している。国道沿いの宅地化その他によって、将来破壊されることが予想されるので、関係方面の方方の協力をお願いしたい。　（富 樫）

第 5 次 調 査

目 的 と 方 法

過去数年間の4次にわたる調査をもとにして、今年はこの遺跡の範囲を確認する調査に的をしぼっておこなった。そのため最初にグリッドを設け、その一部を調査する形をとった。その内容は次のとおりである。

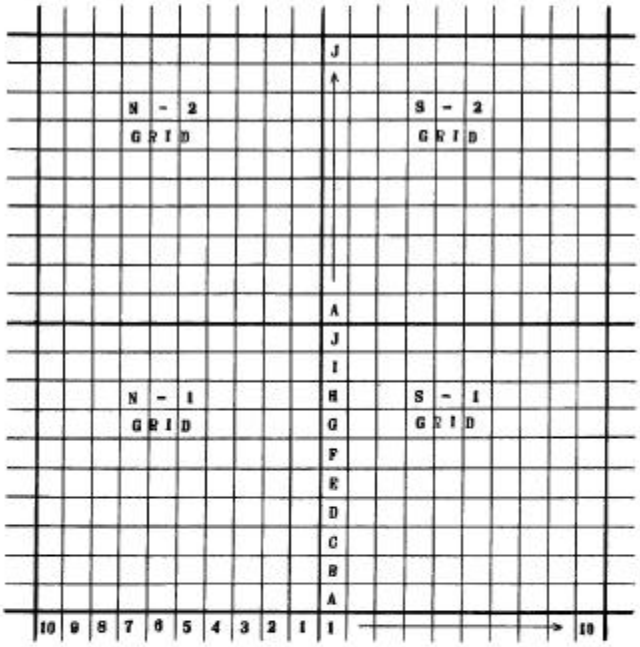
まず最初にグリッドとその名称について説明する。

今回の調査のグリッドは40m×40m（以下大グリッドと呼ぶ）とし、今まで調査したグリッド4m×4m（以下小グリッドと呼ぶ）が、今回設定した大グリッドに100入るようにした。

基準は過去の調査の基点（国道から遺跡に向う東西に走る道路が、遺跡中心地でT字になる。その北隅）（第4図参照）とし、それを東西線の基準線として、大きくS地区（南側）、N地区（北側）と分けて呼び、それぞれの地区で独立させて名称をつけた。

すなわち、S地区では大グリッドS1～46まで、N地区ではN1～51までである。これらの大グリッドの中に設けた小グリッドの呼び方は南北を1～10、東西をA～Jに分け、その組合せで呼ぶこととした。例えばS1A1と呼んだ場合S1は大グリッドで、A1は小グリッドをあらわす。

これらの小グリッドを全部発掘することは今回の調査目的とかならずしも一致しないので、今回の発掘調査は小グリッドの東南隅2m×2mとし、それを完全に掘りあげ、遺物遺構の有無を確認し、その地層断面の実測と、遺構のあった場合その実測を行なうこととして調査を進めた。



第3図　グリッドの名称

第 4 図

主　な　遺　構

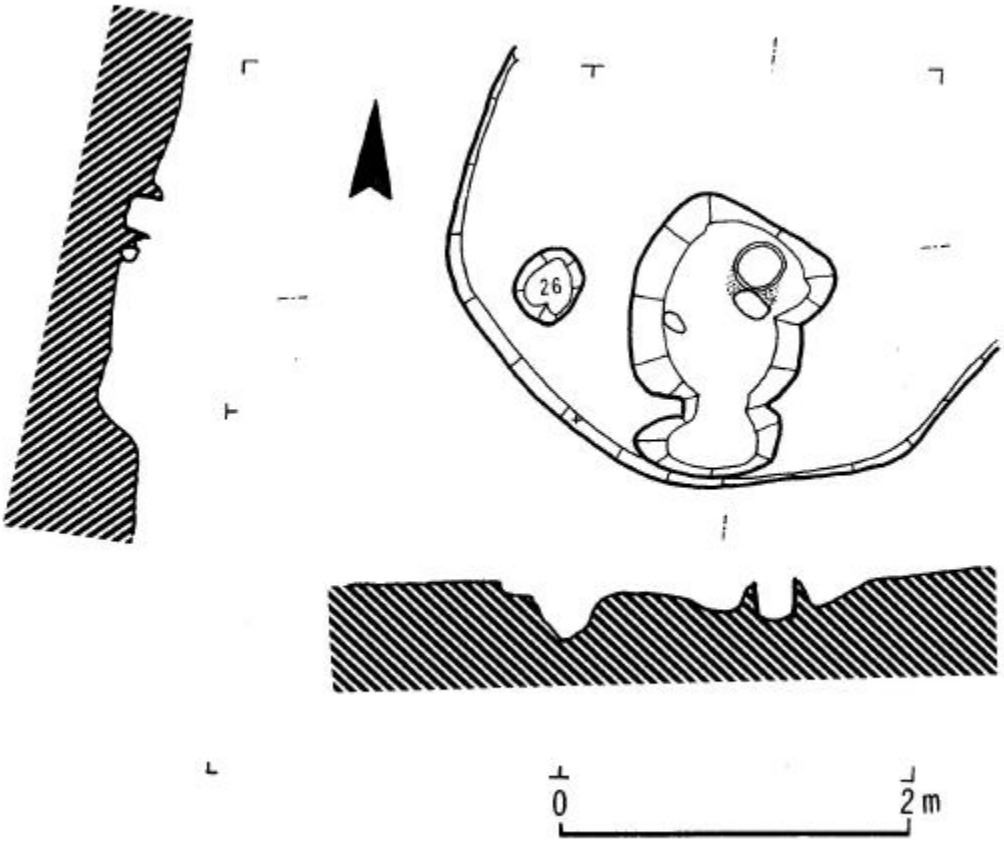
S　地　区

S 26 E 10の住居跡

このグリッドを中心に発見された住居跡は、確認された壁より推定すると、略々3.5m の径をもつ円形のプランをなすものであろう。床面は比較的軟弱で、南壁は少し不明確な所がある。北西隅壁から内部床面に向って、漸次傾斜する箇所は、第２次調査で確認された２号住居跡の施設と同様な性格をもつものと思われる。

炉は住居跡の南よりにあり、南北120cm、東西100cm、深さ50cmほどのピットと埋甕からなっている。ピット内に川原石２個があり、いわゆる複式炉と呼んでよいものであろう。焼土は埋甕の南側に少しあるのみである。

柱穴は南西隅に１個確認しただけである。覆土から磨製石斧１、石鏃2、それに大木10式土器の土器片が出土した。　（鍋 倉）

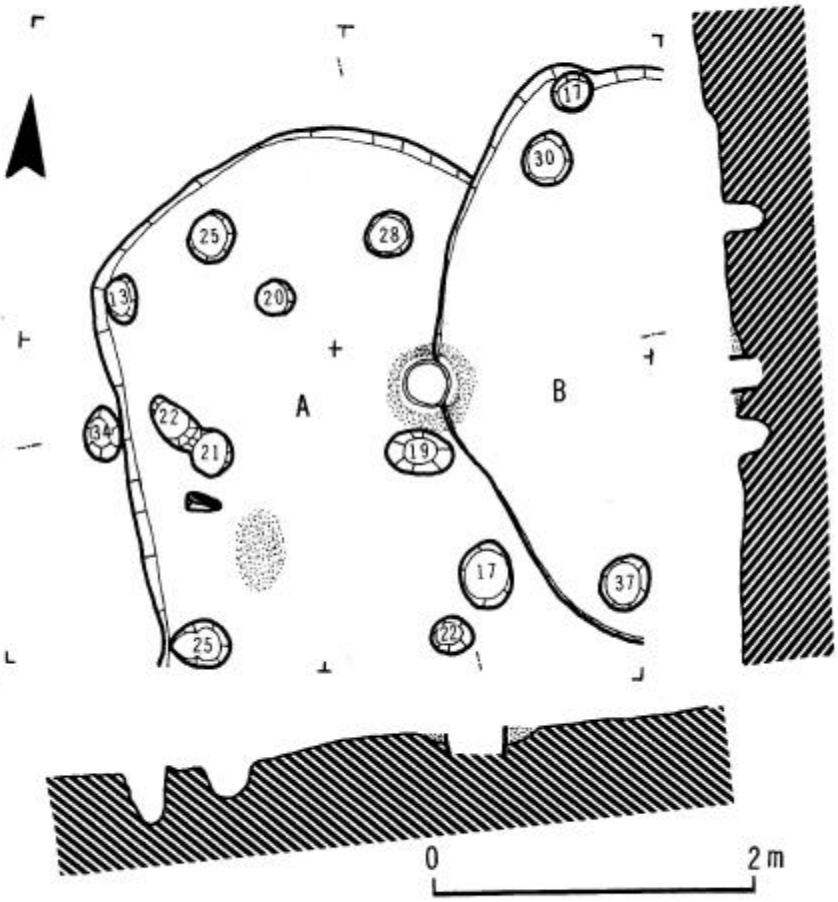


第５図　　S 26E 10住居跡

S 33 J 10の住居跡

分布調査の際発見されたS 33 J 10区の礫と焼土が、住居内のものか否か確認すべく、上区西側S 34 A 10区及びS 34 A 9区、北側S 33 J 9区を拡張し調査した。調査の結果、複合する2軒の住居と埋甕炉が見つかった。S 33 J 9区の住居をA住居、S 34 A 9区の住居をB住居と仮称することにする。BはAの床を掘りこんでつくられ、B住居のほうが、A住居より新しいものである。床面のレベルは、B住居のほうが低い。埋甕炉付近とその北側の、床は堅く、壁もしっかりしており、確実にプランを把握できたが、A住居の南西部分は、壁、床軟弱のため、多少掘りすぎの傾向にある。そのためプランがゆがんでしまった。またS 34 A 10区南側に壁が見つかったが、その走る方向から、Aの住居のものとは考えにくいものである。この部分も、はっきりしなかった所であるが、上述2軒の住居の他にも住居が切りあっている可能性がある。

埋甕炉は、A住居に伴なうもので、大木10式期の深鉢形土器が使用されている。焼土の範囲は東西55cm南北56cm厚さ10cmでそのほぼ中央に底部のない土器が、口縁を下に埋めてあった。焼土中には、灰及び、黒褐色の粘性のある土、炭の混入が見られ、かたくしまっている。土器の周囲には1cm～1.5cm巾で、比較的パサパサした黒灰色の土が、廻っている。S 34 J 10発見の小住居の埋甕でもみられる現象である。A住居の埋甕では、完全に一周せず、所々で焼土と接している点が、



第6図　S 33 J 10住居跡

多少の相異であるが、S33J10区の礫と焼土はA住居の床面より浮いた状態にあった。焼土は混入物が多く、軟かく2次的な堆積と考えられる。なおこの地域から台付土器が出土している。(進 藤)

S34J10の住居跡

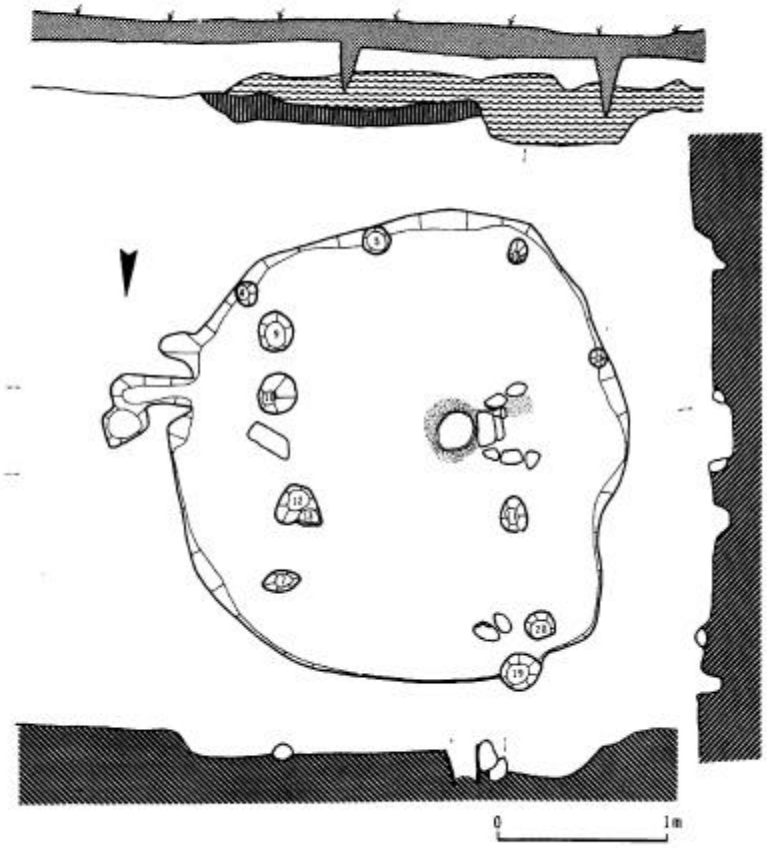
このグリッドから発見された住居跡は径2.65mのほぼ円形に近い形をなす小形のものである。ローム面の掘り込みは15cm前後で、床面は硬く良好である。

炉は住居跡の西よりにあり、埋甕と、それに接してコの字形に川原石を配置した、いわゆる複式炉である。埋甕の周囲と石囲いの一部に焼土があり、また埋甕内部より多くの木炭が検出された。

柱穴は主なもの4個(不規則)と、周壁及びその近くに9個認められたが、全体として浅いものである。

また北西壁付近に2個の敲石が並べて置かれ、東側には1個の川原石があり近くに薄い焼土が見られた。他に床面に接して土器片が発見された。埋甕の土器は大木10式土器である。覆土から炭化物が多く検出された。

(大 友)



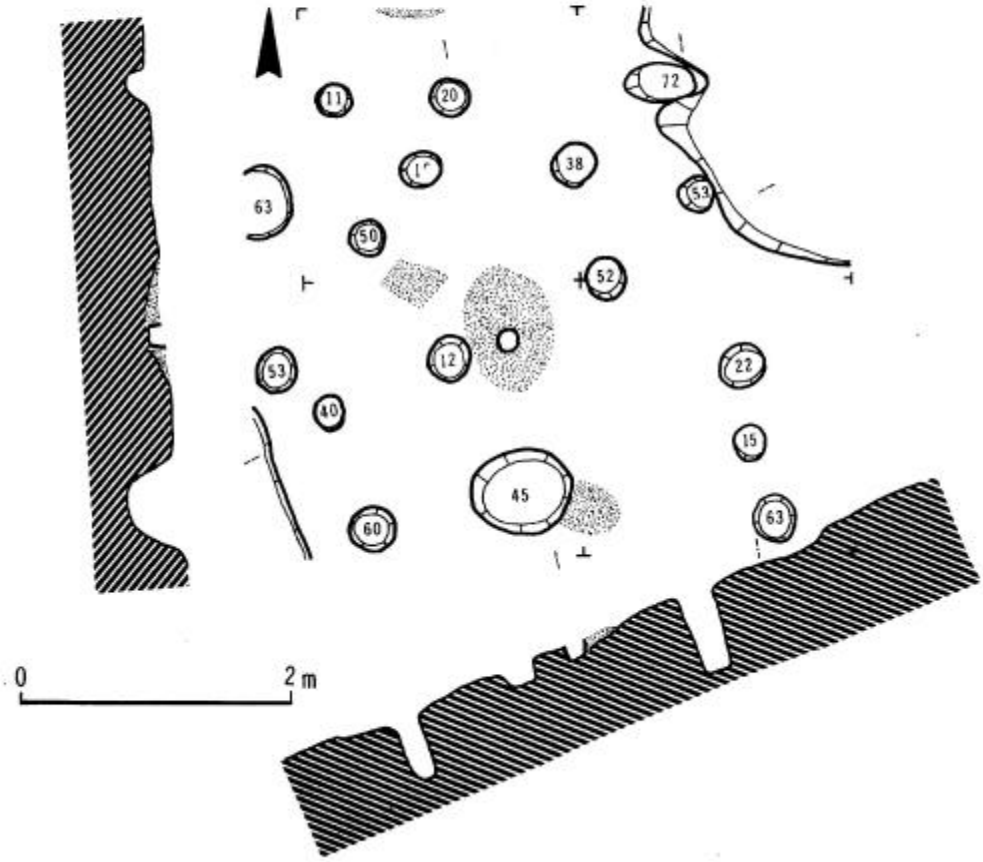
第7図　S34J10住居跡

N　地　区

N13E1の住居跡

第2層目の茶褐色土層からローム面まで、多量の土器片、石斧、石鏃、石匙、石錐の他かなりの小礫（5～8cm）が一塊となって発見されたこのグリット内から、複雑に絡みあった住居跡が確認され、この一帯の住居群の範囲は、更に東部へ拡大されていることが明らかとなった。即ち、グリッド内の北東と南西隅とに2カ所、住居の壁と考えられる切り込みが見られ、その中間には埋甕炉（大木系、径18cm）がN－S94×E－W64cmの楕円状の焼土に設置されている住居跡の3軒とである。後者住居跡の柱穴は、その形状から判断すれば、径30～50cm、深60～70cm前後の4本柱が主柱となっていたと考えられ、その位置は、炉を中心に約3m間隔の正方形の配置を成し、床面はかなり硬質で良好である。

これらの複合住居跡は、地表下80cm地点で発見されているが、グリット隅に検出した住居は、中央の床面より12～14cm程深い。なお、炉跡南部にあるピット（深45cm）の上部に約12cmのローム層がはられている点や、若干の焼土分布、更に北の一部に、かなり厚みのある焼土範囲の確認がなされ、住居跡の存在とも考えられたが、周辺グリットの拡張と精査をしなければ、これら複合住居跡の新旧関係は、速断しかねる状態である。　（鍋倉）



第8図　N13E1住居跡

N 18 E 1の住居跡

本遺跡において始めての土師住居跡は、当グリットを中心に6つの周辺グリット中で検出された。付近は客土作業のため、かなりの土が削除されていたが、現地表より5～10cmほどでローム上面となり、それを掘り込んで南西に若干狭い不整形的正方プランを成す。

即ち、南北（東辺4.08m、西辺3.60m）と東西（北辺4.08m、南辺4.30m）間に違いが見られ、東壁の北寄り部分にカマドがあり、長さ1.70m、平均幅50cm（壁より幅60cm、突端幅38cm）の煙道が伸びている。深さは、住居床面より若干深い28cmを示す。その断面はU字型を成し壁より東へ60cm地点で南北に脹らみを見せ、煙の充満状況を緩和させる施設を呈している点と、先端部に近い壁面には多量の粘土を張り付けていることは、県下における土師住居跡の煙出し遺構を研究する上で重要であろう。

床面は、ほぼ良好で柱穴と考えられるピットは、やや西寄りに4個設置されている。しかし非常に浅く（13～18cm）、屋根架設に困難な点は、屋外を調査した結果、ほぼ等間隔に床上のそれと同じ直径（25～30cm）をもつ支柱が8本見い出されたことにより内外柱穴による屋根架設と考えられる。

南西隅にある深さ49cmの円状ピット（1.22×1.10m）は、本遺構に付随した貯蔵用ピットである。その他、東壁に近い部分では浅い（10～20cm）鍋底状のピットが床面に穿がれている。溝的役目をする施設かは不明であるが、北壁および西壁付近には幅15cm、深さ6cmの人工的掘り込みが見られた。また北壁寄りには長さ1.20m幅30～50cmの栓抜状ピット（東部が円状）があり、その南北に各々、径14×10cm、深さ10cmの小穴が施こされていた。壁は、北部が垂直で南、東、西部は漸次的な落ち込みを呈している。

焼土は、大小4箇所に散在し、うちカマドの径100cm ×82cmの楕円状を呈し、厚さ10～15cm、断面は鍋底状を示し床面上より順次薄くなる。

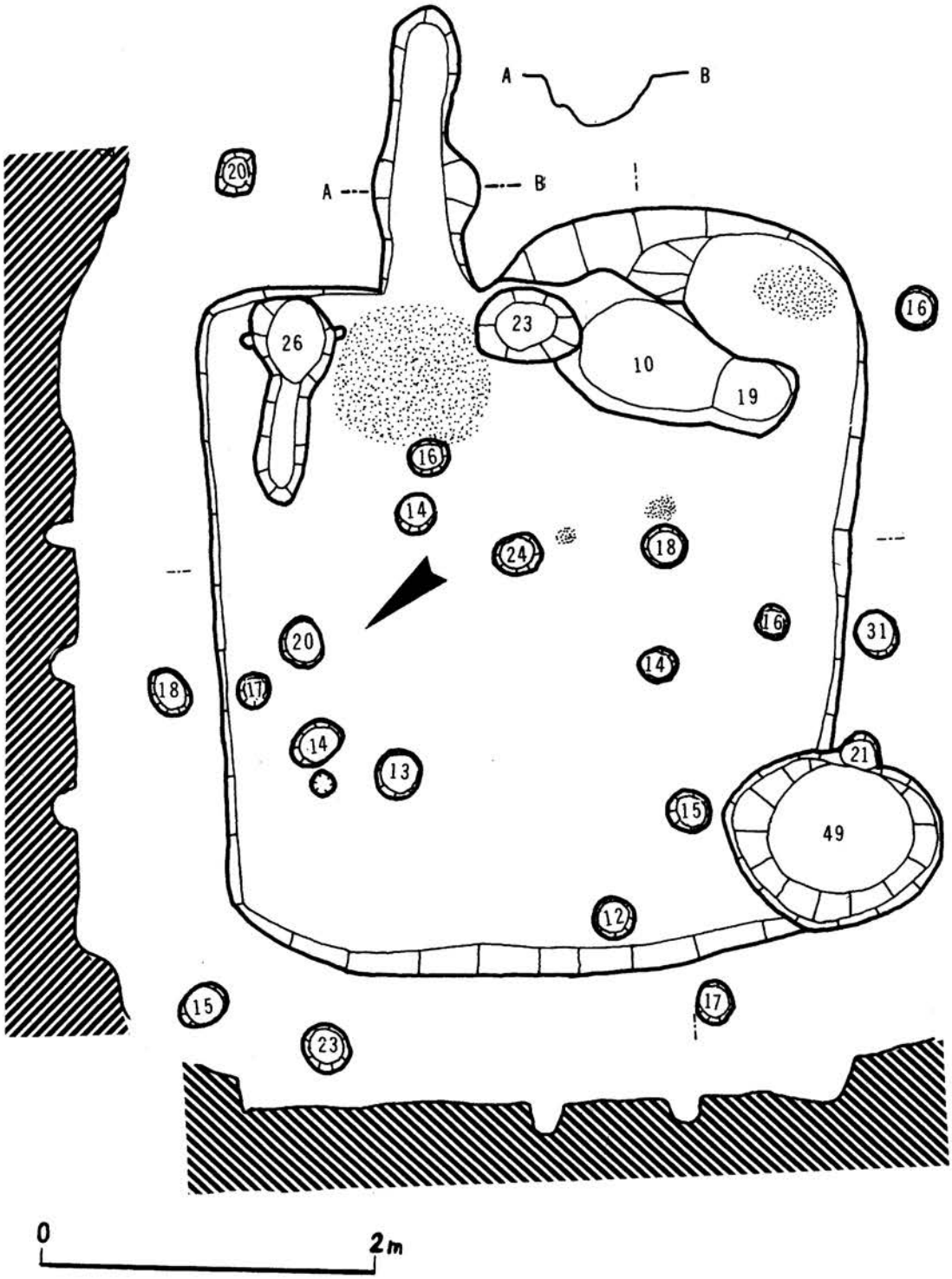
その焼土を取り除いた結果、55×65×30（深さ）cmのピットが発見された。

出土遺物は、北東壁寄りに鉄製刀子（長さ11cm、幅2.8cm）が床面より3cm程浮いた状態で発見された他、大部分は土師器でカマド周辺に集中的に発見された。土器は、ほとんど甕であり6個体程が復元可能である。

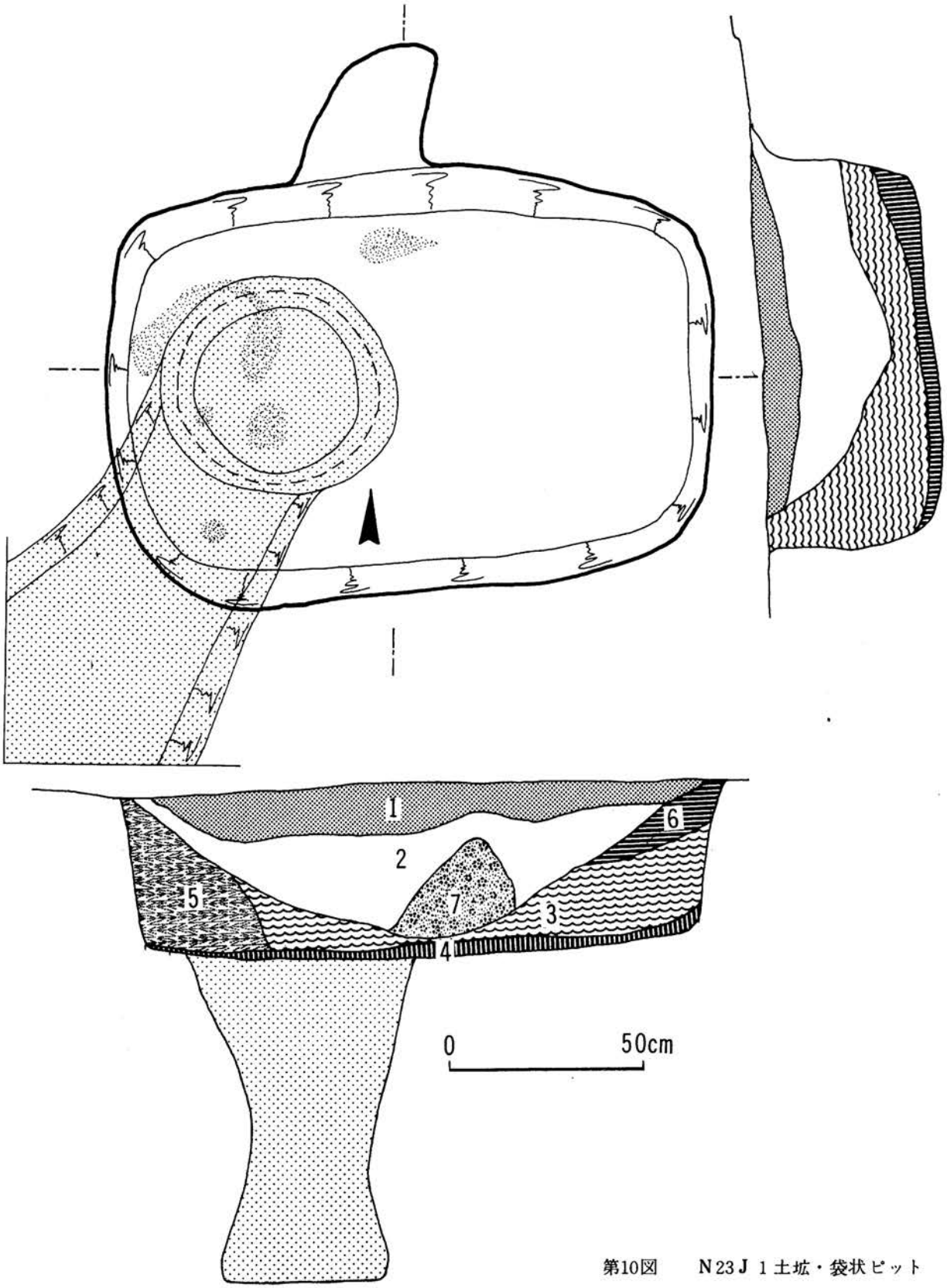
胴部は全面にはけ目文様が施こされ、底部に木の葉文様が明確に残っていた。胴部よりのたち上り状態は、「く」の字型を見せ、口縁部は無文で非常に薄手の作りである。

土師甕は、多少の差異があるにせよ、胴部中央から底部にかけて、若干の媒付着がみられ、胎土中には小礫、石英質の小石が比較的多く含まれている。底部はほとんど綱木文や木葉文があり、概して5～6の凹凸が、胴部にみえ輪積み方式を採用した後、へらなどの工具で修正した痕跡が底部、口径部に顕著にみられる。その器形様式から、本遺跡から発見された土師は、比較的新しい時期に比定され、8世紀後半～9世紀初頭にかけてみられるものと考える。

なお、甕型の他、坏と考えられるものが僅か1片のみ出土していることを付記する。（鍋 倉）



第9図　N18E 1住居跡



第10図　N23J 1 土坑・袋状ピット

N 23 J 1 の土坑、袋状ピット

土坑　この土坑の確認面はソフトローム上面である。平面形はほぼ隅丸長方形を呈している。大きさは口部で長径158cm、短径110cmを測る。深さは確認面より45cmを測る。主軸方向はE～Wである。壁はほぼ垂直に立ちあがっておりロームのしっかりした壁である。

土坑覆土の土層は7層にわけることができる。1層、黒褐色で若干ローム粒子を含むよくしまった層である。2層、褐色土層でありやわらかく炭化材、および焼土粒を含む。3層、明褐色でありローム粒子を多量に含み炭化材、焼土を部分的にではあるが帯状に含んでいる。4層ロームブロック、ローム粒子を多量に含むボソボソしたやわらかい層である。5層、赤褐色で大きめの炭化材を含み、その周りに焼土が点在しているボソボソした層である。6層、ロームブロックを多量に含む黄色の層である。7層、大きな炭化材を帯状に含んだボソボソした茶褐色の土層である。

本土坑は袋状ピットと重複関係にあるが袋状ピットが土坑、坑底部にて確認されていることから推察して本土坑の方が新しいものと推定される。

又本土坑よりの出土遺物は縄文時代中期の土器である。

袋状ピット　このピットは土坑、坑底部ローム面でありロームを堀り込んで作っている。平面形は、ほぼ円形を呈している。大きさは長径約60cm、短径約58cmを測り、確認面よりの深さは約83cmを測る。壁はほぼ垂直に落ち込みながらピット中程よりやや張り出し袋状を呈している。ピット南側において西南方向に溝がのびているが本ピットにともなうものかどうかは不明である。

本ピットは前記土坑と重複関係にあり、土坑を調査していく過程で坑底部にて確認されたものであり新旧関係は本ピットの方が古いものと推定される。

また本ピットよりの出土遺物は縄文時代中期の土器である。このことからして本ピットの時期は縄文時代中期であろうと推定される。　（石郷岡）

フラスコ状ピット

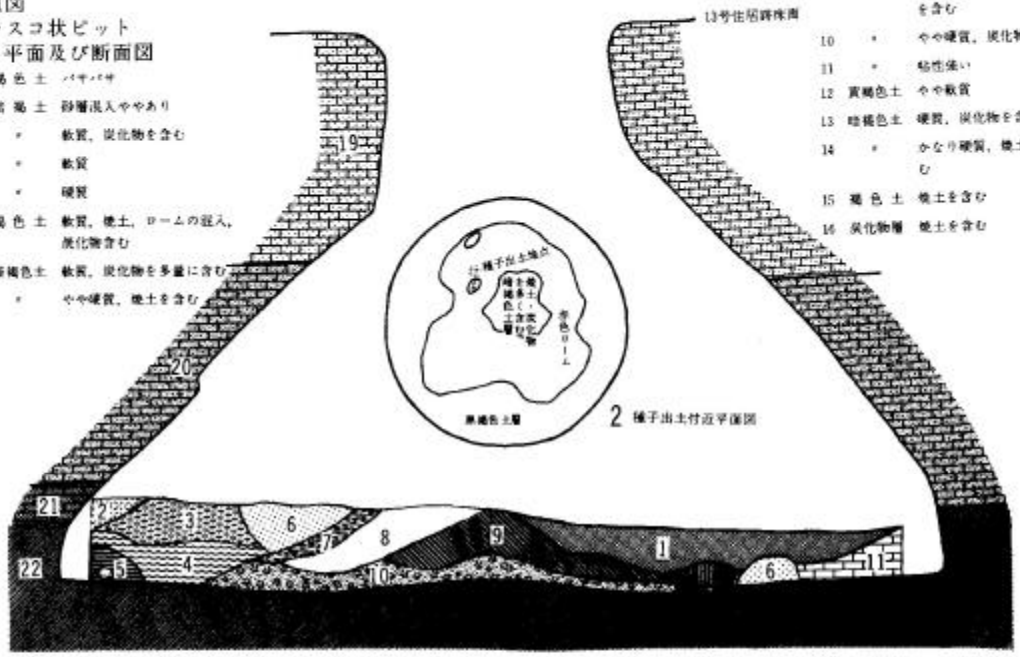
このフラスコ状ピットは第4次発掘調査の時発見され13号住居跡内に発見されたものである。昨年の調査で完掘できず、今回の調査でその精査をはかったものである。

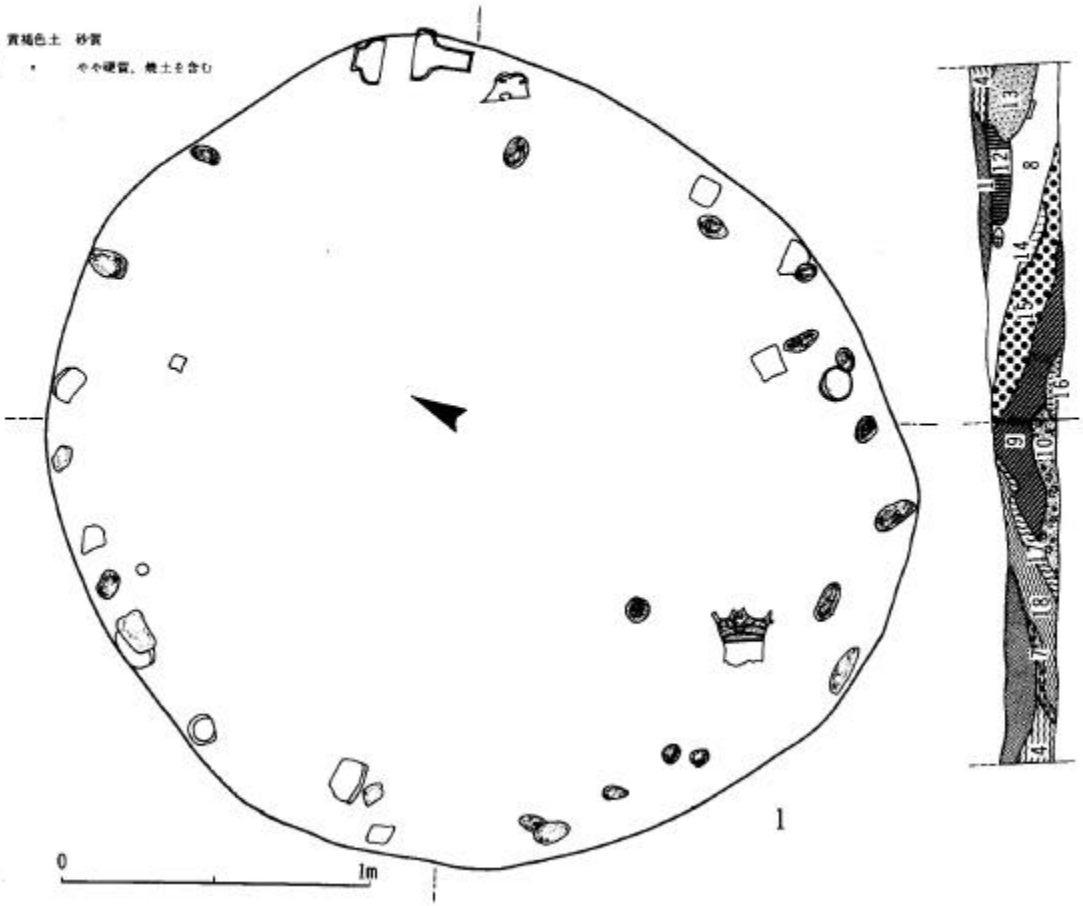
大きさは口径76cm、頸径約100cm、底径（南北）286cm、（東西）256cm、深さ（住居跡床面より）179cmを計るもので、ピット床の平面形は楕円形である。

発掘調査の都合上、中につまっている土の断面は床面上20cm位のところで、十字に切って実測してみた。その結果、図のような層位をなし、2、3、5、11、16の各層はどちらか一方の断面にしか出てこない層で、これでもブロック状をなしていることがわかる。また土はフラスコ状ピットの中心部に捨てられ、そこから周囲に広がって行く様子が地層の流れから判断できる。それは出土遺物の出土地点を見ても理解される。フラスコ状ピット平面図に遺物の出土地点を記入してみた。これは床面から上30cm位までの出土地点を平面図にしたものであるが、記録できるような比較的大き

第11図
フラスコ状ピット
平面及び断面図

1 褐色土 パサパサ
2 暗褐土 砂層混入ややあり
3 〃 軟質，炭化物を含む
4 〃 軟質
5 〃 硬質
6 褐色土 軟質，焼土，ロームの混入，炭化物含む
7 暗褐色土 軟質，炭化物を多量に含む
8 〃 やや硬質，焼土を含む
9 褐色土 かなり硬質，ローム塊，焼土を含む
10 〃 やや硬質，炭化物を含む
11 〃 粘性強い
12 黄褐色土 やや軟質
13 暗褐色土 硬質，炭化物を含む
14 〃 かなり硬質，焼土炭化物を含む
15 褐色土 焼土を含む
16 炭化物層 焼土を含む
17 黄褐色土 砂質
18 〃 やや硬質，焼土を含む





い遺物は壁に近い所で発見された。これはこの部分に意図的に埋めたのではなく、ころがりこんだ形跡と理解される。

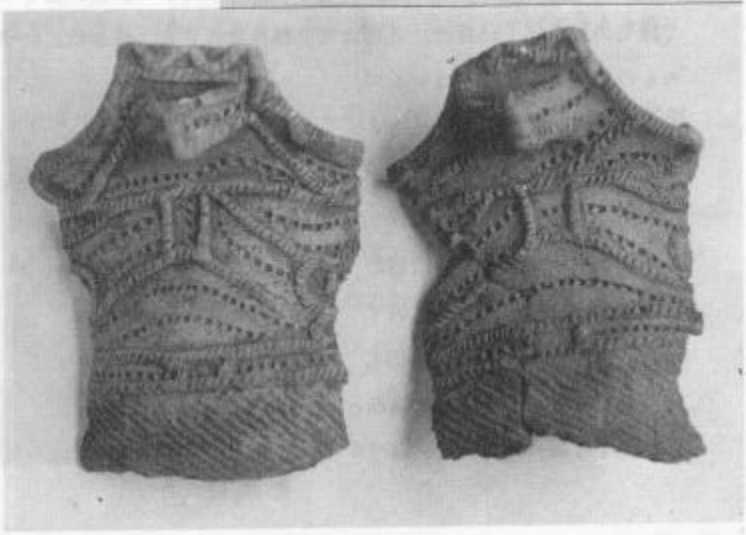
深さ140cmのところから、赤色の種子を発見した。この種子の包含層は焼土、灰を含む固い層で、種子はこの中から、穂のまゝ埋まり、種子のみが残ったような状態で、順序よく並び、それぞれブロックをなして出土した。種子の出土した深さの平面図は第11図の2である。後世アリ、その他によって運びこまれた形跡は土層その他からみてまったく考えられないものである。

なお、発掘調査（ピット内の）後このピットの中に金属製自記温湿度計（7日巻、NAKAASA CO,LTD,№9828、温度－20℃～40℃、湿度0％～100％）を入れて調べてみた結果、外気の変化に関係なく、温度15℃、湿度93％と一定であった。（ピット内に装置した後、ビニールで蓋をしておいた）。

出土遺物は土器（鉢、浅鉢）の完形に近いもの、三角土製品、凹石、石ベラ等が出土し、他に焼けた川原石もかなり出土した。　（五十嵐）

▲フラスコ状ピット内遺物出土状況

▶同内出土土器▼



下提遺跡出土植物の生育経過と種名の考定について

秋田県農業試験場
山口邦夫，須藤孝久，鈴木光喜

1．生育の経過と種名の考定

昭和47年８月５日、秋田市社会教育課より依頼された当時の幼植物は、発掘現地の土壌を入れた容器中で、約150個体が１～２cmに伸長し子葉の展開期であった。当場では８月５日にこれを素焼ばちに移植し、さらに８月17日に肥沃な土壌をいれた１／5000ａポットに移し、各ポット３個体程度に間引いて栽培管理を行ないながら生育を観察した。ポットはガラス室内に置いたが、晴天時には網室に移し外気にならした。

幼植物は素焼ばち移植時に、子葉の形状から２種類の存在をみとめたので、種類別にわけて生育させた。これらは後記の形態的観察から大部分がハルタデ（Polygonum Persicaria Linn）であり、５個体だけがイヌタデ（Polygonum longisetum De Bruyn）であるとみとめた。

ハルタデは８月25日花穂があらわれ、28日が最初の開花で、９月19日には成熟種子の落下がみられたので、その後、順次採種した。

イヌタデは９月14日に花穂があらわれ、９月19日が最初の開花で、10月18日から同様にして採種を行なった。

2．形態的観察について

1）ハルタデ

子葉は長卵形鈍頭で表裏面とも緑色、長さ６～８mm、巾2.5～3.5mmである。(一般に子葉の裏面は紫紅色とされているが、出土植物は多湿で光線不足の状態で発芽したためであろうか。これらの個体より採種したものを10月末に変温処理し、明条件下で発芽させたものの裏面は紅紫色となった。)第３葉以降葉の中央部に濃緑黒色の斑点があらわれ、その後分枝がみられる。茎は紅紫色で、成熟個体の草丈は30cm～37cmである。第５～６葉以降は長だ円状被針形、長さ６～９cm、幅1.8～2.7cm、側脈は６～９対、主脈に毛を散生する。葉鞘は筒状で膜質、長さ３mm（下部節）～９mm（上部節）で縁毛の長さは１mm程度。花穂は密な穂状で直立し、長さ約2.5～3.5cm、花被片は紫紅色で、白色のものがまじる。種子はレンズ形と三稜形の２種があり長さ２mm、黒色で光沢がある。

2）イヌタデ

子葉は、やゝ非相称の広卵形鈍頭、表面は緑色、裏面はわずかに紅色、長さ約５mm、幅約４mm、第１葉はひし状広卵形鈍頭、長さ約1.3cm、幅0.6～0.7cmで

発芽時　　約２週間後

基部はクサビ形、葉縁に短毛が少しみられる。第3葉以降分枝がみられ斜上する。茎は高さ35～47cmとなり紅紫色、無毛、葉は長さ2cm（分枝上のもの）～9cm、幅1.2cm～2.2cm、広被針形、鈍頭、側脈は4～8対、葉鞘は筒状で長さ5～8mm、ほぼ同長の縁毛がある。花穂は密な穂状で長さ1.5～4.5cm、花被は紅色で、がくは深く5裂し、長さ約2mm。種子は3稜形、黒色で光沢があり先がとがる。

（注）イヌタデは秋田県内に最も普通にみられるが、ハルタデは比較的少ない。発掘現地では（9月1日現在）オオイヌタデ（Polygonum lapothifoljum Linn）、イヌタデが多く、ハルタデは、ごく少数がみられた。

また本調査にあたり、秋田県立湯沢高校教諭、望月陸夫氏の助言を得たことを附記して謝意を表する。

ま　と　め

第5次調査は目的の項でも述べたように、この下堤台地約12htの分布調査と、時間的に余裕があれば、いわゆる下堤遺跡の範囲確認することにあった。

この目的の一つである分布調査の結果、第4次まで調査し、われわれが今まで下堤遺跡と呼んできた縄文中期中葉の集落跡の他に、台地西南端に縄文中期末葉の集落跡が、また東端には古代の土師器の住居跡のあることを確認したのである。そしてこの三つの遺跡の広がりも遺物の分布状態から、その大略をつかむことができた。

下堤遺跡はこの三つの遺跡を総称して呼ぶこととなる。そこで今まで下堤遺跡と呼んできた遺跡をA地区とし、今年新しく見つかった中期末葉の遺跡をB地区、古代の住居跡のある地区をC地区と呼ぶこととする。

A　地　区

この遺跡は中期中葉（大木8a、8b式、円筒上層b式、c式）の遺跡で、今年の調査で、S16J5、N24J1区で同時期の遺構が確認され、その広がりは南北200m、東西150mほどあるものと思われる。

今年調査した範囲から新しく住居跡が4軒以上見つかっているので、今まで21軒以上の住居跡が確認されたことになる。今後の調査でもっと多くの住居跡が確認されるであろう。これらの住居跡の調査で、その埋設状況から吹上パターン的なものが確認され、また特殊な遺構としてフラスコ状ピットが確認され、それは屋内施設であることが明らかとなった。また内部の調査の結果、中につまっている土はブロック状をなし、今年の調査でそれが再度裏づけられ、遺物は捨てられた状態で、壁にそって主に発見されることを確認した。これは土を中に捨てられると中心部だけが高くなり、そのため土器、石器等の比較的大きなものは壁の方にころがりこんだ結果と解釈される。

今後これらの住居跡でフラスコ状ピットをもつ住居跡と、持たない住居跡との関係、周辺遺跡と

の比較など多くの問題がある。

B　地　区

この地区からは今年の調査で住居跡5軒が確認された。それらの住居跡は直径3m前後の円形プランをなし、複式炉をもつ、大木10式のものであることがわかった。この遺跡の範囲は遺物の出土状態から見て東西100m、南北80m前後と推定される。大木10式の住居跡は米ケ森遺跡で2軒確認されているだけで県内では不明な点の多い時期で、今後の調査が期待される遺跡である。

C　地　区

この地区からは土師器の住居跡が一軒確認された。それは前項で報告したように、方形で、カマドのある住居跡である。未だ一軒だけの確認なので、どの程度の住居跡があるか不明であるが、遺物の分布からみると、その範囲は東西80m、南北120m前後ありそうである。

これら三地区の広がりを遺物の分布から推定したが、その他にも遺物は少ないが散布する地域がある。今回の調査は各遺跡の詳細な範囲を調査できるだけの時間的余裕はなかった。来年度この三つの遺跡の範囲確認のための調査を進めたいと考えている。

発芽種子について

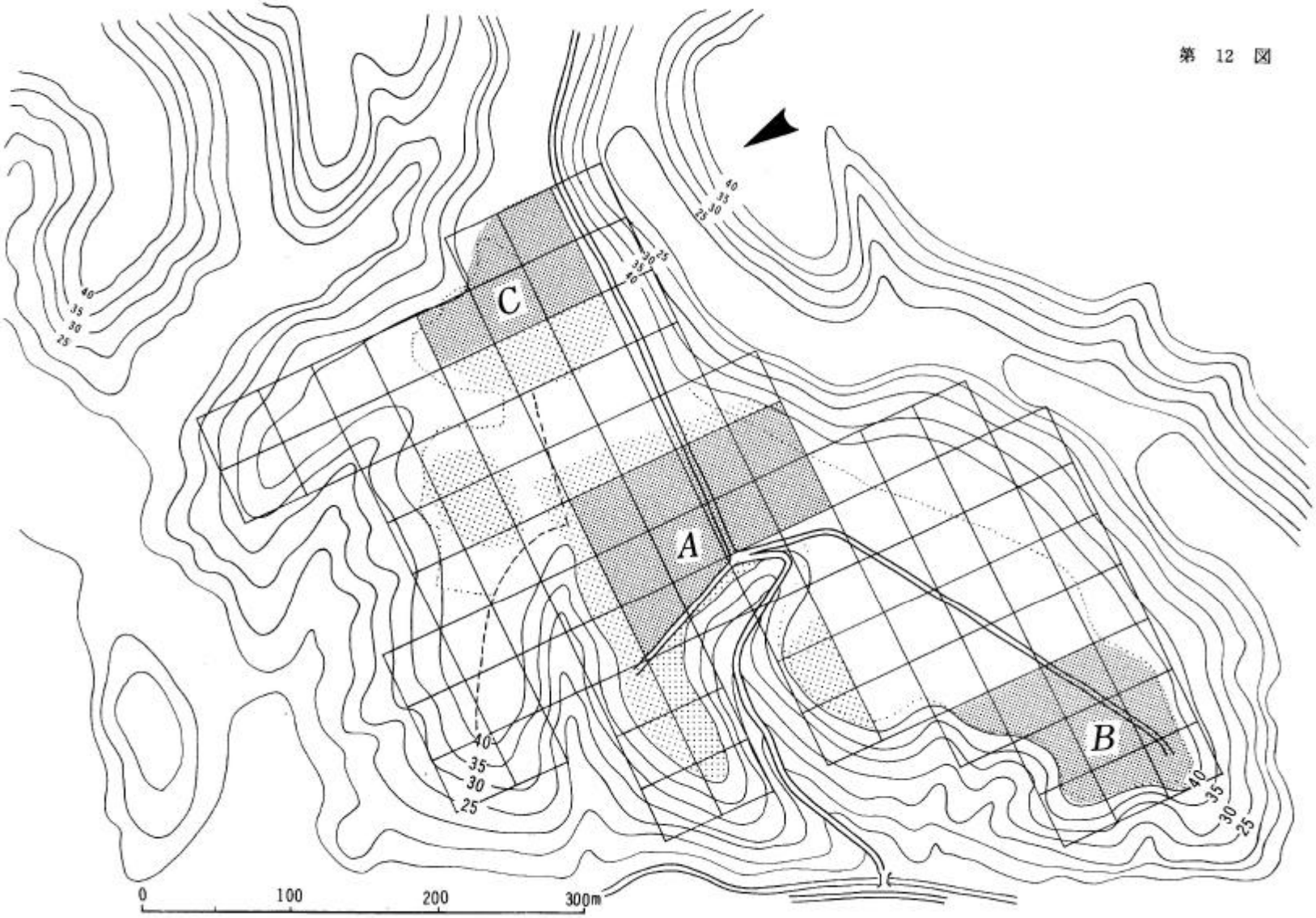
13号住居跡内のフラスコ状ピットから発見された種子が発芽したのは偶然なことであった。種子は7月26日、フラスコ状ピット内で住居跡床面より深さ140cm前後の炭火物、焼土等を含む層から発見されたものである。そしてポリ袋に土と一諸に採集し、他の遺物と一諸に保管していたものである。それが7月31日早朝遺物整理中発芽しているのを発見したのである。だから発芽は調査者の意図によって発芽したのではなく、夏で保管場所が高温であったこと、ポリ袋の中で温床的な状態になったこと等から発芽したのではないかと思われる。

早速この植物の栽培管理と種の同定を秋田農業試験場に依頼し、調査していただいた結果、前項にあるようにハルタデ、イヌタデであることがわかった。

年代は、この種子と伴出した土器から、縄文時代中期中葉のものであると断定したが、このことについて、いろいろな形で疑問が出された。その主なものは①そんなに長い間種子が生きつづけることができるだろうか、ということと、②アリ等の仕業で後世に入りこんだものではないか、というものであった。

これらの疑問は今まで例のないことなので当然であろう。だからわれわれも明解な回答をもってはいないのである。ただ②については前頁「フラスコ状ピット」で述べたように後世に入りこんだと判断できるものは全くなく、縄文時代中期中葉のものに間違いはないのである。とすれば①については発芽するまで種子は仮眠状態にあったと推察する以外は考えられない。種子等の仮眠できる条件はどんなものか、これも現在不明であるが、フラスコ状ピットを発掘後、内部の温湿度を計測した結果、温度15℃、湿度93%でこれは外気が変化しても一定していたこと等は仮眠条件の一つの手がかりとなろう。(富　樫)

第 12 図



◀ S 26 E 10の
住居跡

N18E 1住居跡 ▶
出土土器

▼ N18E 1の住居跡

▲ S 33 J 10の住居跡

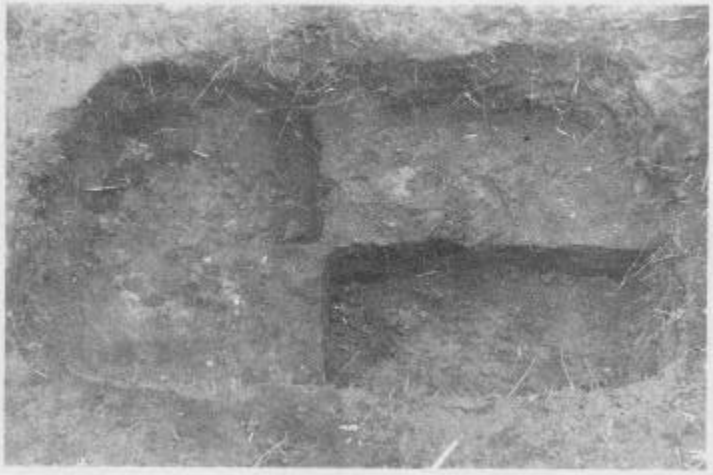
S 33 J 10住居跡の埋甕 ▶

▼ N 18 E 1 住居跡 遺物出土状態

▲ S 34 J 10の住居跡

◀ S 34 J 10住居跡の埋甕

N 23 J 1 の土坑 ▶



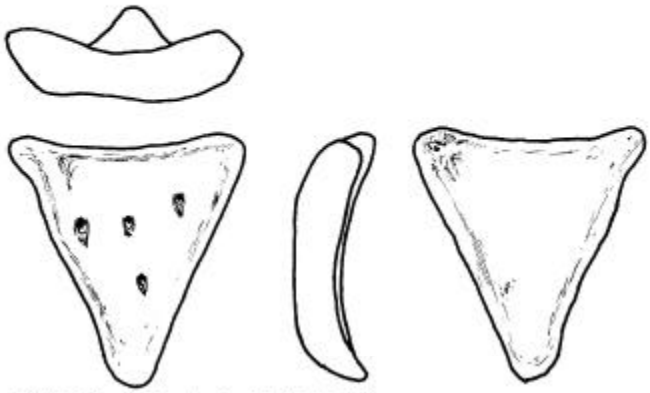
遺構・遺物確認グリッド一覧表

N 地区	遺構			遺物	
グリッド名	住	ピット	溝	縄文	土師
N2J1	—	—	—	—	○
N2E10	○	—	—	—	○
N4J1	—	○	—	—	○
N5J5	—	—	—	—	○
N5J1	—	—	—	○	○
N6J1	—	—	—	—	○
N8J1	—	—	—	○	—
N12E1	○	—	—	—	須恵
N13E1	○	—	—	○	—
N13J1	—	○	—	—	—
N13J5	—	—	—	○	—
N14E1	—	○	—	—	—
N14J1	—	—	○	—	—
N15J1	—	—	—	—	○
N16E1	—	—	—	—	○
N17E1	○	—	—	—	○
N18E1	○	—	—	—	○
N19E1	—	—	—	—	○
N19J1	—	—	—	—	○
N20J1	—	—	—	○	—
N21J1	—	—	—	○	—
N23J1	土坑	—	—	○	—
N24J1	—	—	—	○	○
N32J1	—	○	—	○	○
N33J1	—	—	—	—	○
N34J5	—	—	—	—	○
N39E1	—	○	—	—	○
N39J1	○	—	—	—	○
N41J1	—	○	—	—	—
N42E1	—	—	—	○	—
N45J1	—	—	—	—	須恵

S 地区	遺構			遺物	
グリッド名	住	ピット	溝	縄文	土師
S 1J5	—	—	—	○	—
S 2J10	—	○	—	○	—
S 6J10	—	—	—	○	—
S12J5	—	—	—	○	—
S15J10	—	—	—	○	—
S16J10	○	—	○	○	—
S25E10	○	—	—	○	—
S25J10	—	—	—	○	—
S26E10	○	—	—	○	—
S26J10	—	—	—	○	—
S29J10	—	○	—	○	—
S30E10	—	○	—	—	—
S31J10	—	○	—	—	—
S33J10	○	—	—	○	—
S34J10	○	—	—	○	—
S36J10	—	—	—	○	—
S44J5	—	—	—	○	—
S45J1	—	—	—	○	—

○訂正　第4次概報の13号住居跡フラスコ状ピットについてはボーリングでの確認であり、今回の調査の記述が正しいものである。

▶
フラスコ状ピット内
出土・三角土製品
S＝1／1



発掘調査員および参加者

発掘調査主体　秋田市教育委員会　秋田考古学協会

発掘調査期間　昭和47年7月23日～8月5日（14日間）

調査員　日本考古学協会会員　奈良修介
日本考古学協会会員　富樫泰時
秋田県文化財専門委員　鍋倉勝夫

参加者

秋田考古学協会会員　五十嵐芳郎　畠山憲司　大友俊和

秋田大学　学生　野上剛志　安藤麻須子　畠山貞子　佐藤まつみ　村岡百合子　阿部千鶴子

立正大学大学院　中屋一生

東京教育大学研究生　石郷岡誠一　中央大学　学生　庄内昭男

明治大学　学生　進藤公子　中村八重子　小玉　準

立正大学　学生　斎藤　隆

金足農業高等学校　教諭 泉　哲郎　生徒 佐藤紀子　谷口重光　中泉紀規　伊藤整剛　菅原孝博　斎藤久則　相馬昇二　高橋　博　浜田忠雄　藤原一男　加藤重光　加藤博英　三浦薫　武藤孝文　安田忠市　佐藤信明　佐藤昌行　酒井喜美男　佐々木尚登　伊藤桂子　小納谷明美　鈴木啓子

秋田北高等学校　教諭 中谷雅昭　生徒 岡部純子　田口　都　佐藤美智子　奥山節子　戸祭志保子　大堤裕子　工藤恵子　佐藤洋子

敬愛学園高等学校　生徒　太田由起子　池田信子　下村七三恵　境本都々子　相馬加智子　鈴木富士子　手塚睦子　田口洋子　玉尾悦子

経済大学付属高等学校　生徒　目黒明彦

鈴木金一　鈴木銀一　鈴木長治　岩崎岩五郎

事務担当　秋田市教育委員会社会教育課主査　佐々木　栄　孝
〃　〃　主事補　菅　原　俊　行

昭和48年1月 発行　**発行者　秋田市教育委員会**